

開学の城跡 再興考える

首里城

象徴に
なるまで



□ 26 □

1992年に復元された首里城正殿は、柱や梁に地元の木々は使われていなかった。火災からの再建材の種類は、今秋をめどに国が決める。国頭村議会がやんばるの木材の使用や調達を求める決議と意見書を全会一致でまとめるなど、今回はできる限り使ってほしいという声が高まっている。

米軍施政下の1950年に首里城跡で開学した琉球大学(現在は西原町)で、こうした機運に応える研究が進んで

第2部 戦をくぐって

琉球大学①

いる。工学部のカストロ・ホワン・ホセ教授(60)は構造工学Ⅱは「主に使われることになる国産ヒノキに対して、県産イヌマキ(チャーギ)は曲げや圧縮に耐える力が1.2倍以上優れている」と実験の結果を語る。国頭村からオキナワラジロガシの原木も入手済み。十分に乾燥させてから10月ごろに強度試験をスタートし、国側にデータを提供



①イヌマキの木が割れるまで上から圧力を掛け、強度を数値化する実験について説明するカストロ教授(3日、西原町・琉球大学の建学の碑。当初は首里城跡にできた大学本館横にあった青銅板で「本館は、かつて玉座のあった場所に位置している」と刻まれている)3日、西原町・同大「首里の杜(もり)」

33年。国重要文化財の銘刻家住宅(伊是名村)や古民家の調査をする中で、地元の木々で造られた建築物にもこの愛着を知る。首里城火災の当日は、ハワイ大学に出張中だった。海の向こうの県系人たちがすぐに再建のための寄付金を集め始めた熱量を感じた。「技術者として微力ながら貢献したい。先人が経験的に知っていた木の強さを数値化

すれば、現代の仕事に取り入れる説得力が出る」と話すカストロ教授。今年3月には西田睦学長ら教職員約40人の一人として火災現場を視察している。

視察は琉大が「首里城再興学術ネットワーク」の構築を目指す動きの一つで、専門分野の異なる研究者たちが参加した。いつもは互いに触れ合う機会が少なくても、帰りのバスは再建について話し合う声でにぎやかだったという。

ネットワークは首里城再建に役立つ研究へ資金を出す。建築や歴史といった幅広い知が求められる再建をサポートすることを、国際地域創造学部の石原昌英学部長(61)は「社会言語学Ⅱは「沖縄最初で、唯一の総合大学の責任」と話した。母校でもある琉大の歴史を踏まえた言葉だった。

(首里城取材班・堀川幸太郎) 11日、月曜日掲載

情報・感想をお寄せください

eメール shakai@okinawatimes.co.jp

電話 098(890)5555